《座談会》

学生の読書と表現力

〈出席者〉（ＡＢＣ順）

大学経済学部助教授　中村　春次
大学神学部教授　緒方　純雄
女子大学教授　大橋寿美子
大学文学部教授　玉村　文郎
女子中学・高等学校教諭　吉岡　幸子

（司会）岡　満男
（大学文学部教授）

本を読まないと言われるが

岡　きょうの座談会のテーマは、「学生の読書と表現力」ということです。いまわが国では、だいたい年間、書籍と雑誌とを合わせると四〇億冊を超える本が毎年出版されているわけです。この数から申しますと、世界でも指折りの〝出版王国〟ということになります。ところが最近本を読まない若い人がふえたとよく言われますね。数年前に日本新聞協会の研究所が東京で調査した結果ですが、学生について見ると、だいたい三分の一が雑誌をまったく読まないという数字が出ております。また一四％が一年間に一冊の書籍も読んでいない。学生生活にとって読書は欠くことのできぬたいせつなものと考える私には、本を読まぬ学生がかなりいることをしめす数字がたいへんショックでした。この東京の例から引きまして、同志社の学生の場合もおそらく本を読まないものがふえているのではないか。そのことは私ども日々の生活で実感させられているように思うのですが、皆さんの学生時代と比べて、いまの学生の読書という問題をどうお考えになっているか、その実態も

含めてひとつお話を進めていただきたいと思います。

玉村　皮切りで恐縮ですが、私が主として接する学生は文学部の学生、わけても国文学専攻の学生です。したがって本来ならば、日本語で書かれたものは英文のものなんかと比べて抵抗力がないから大量に読めるだろうと思うのですけれども、それほどたくさん古典といわれるようなものなど読んでいるとは思われません。たとえば明治文学とか、そういうようなものでもあまり読んでいないんですね。

それで、ちょうどこの座談会の企画を聞いた直後に、一般教育科目の国語の時間に、百六名の受講生から簡単なアンケートをとって大急ぎで整理してみました。たくさんたずねますと答えが複雑になりますので、大学に入ってから読んだ本をあげてくださいというのが第一問。一回生がわりあい多いものですから、八カ月ほどの間の読書ということで書いてもらったのですが、経済とか商学部の四回生もおりましたので、書かれた本の量はずいぶんまちまちでした。それから第二問は、とくに感銘を受けた本をあげてください。アンケートの内容はこれだけなんですが、なかには遅れて入ってきたためか、名前と番号だけ書きまして一冊も書いてないのがありましたが、大学に入ってから読んだ本というのでは、概観いたしますと四冊ぐらいあげたのが多かったです。たくさん書いているのはやはり四回生ですね。一〇冊以上書きましたのが六〇人ほどおりまして、そのなかには三〇冊以上というのが珍しいのでかぞえましたら四人おりました。四〇冊ほど書いたのも一人おりました。それはだいたい二回生以上の学生だったように思います。

それから、とくに感銘を受けた本という問は、読書傾向といいますか、どんなものを最近の学生たちが読んでいるかということを知りたかったからですが、古典もたくさんあげておりました。だいたい一点か二点ですが「とくに」ということにこだわったのか、感銘を受けたものがないというわけか、一冊もあげなかった学生もかなりおりました。

あげたなかで比較的多いと思いましたのは、漱石の『心』が四人、『窓ぎわのトットちゃん』が三人、大学に入ってから読んだのでしょうか(笑)、同じく井上靖の『あすなろ物語』が三人、『アンナ・カレーニナ』が三人、『罪と罰』二人、あとはゲーテの作品とか、日本文学のいろんな作品、ばらばらでした。それから私が読んでいないものですけれども、鈴木健二というNHKのアナウンサーの『自分学のすすめ』というのが二人ほど、『塩狩峠』というのが四人ありました。それから『勉縮のすすめ』とか、そのほか全然私が知らないような作品をあげたのがありましたけれども、複数の答えが出てきました本はだいたいそんなところです。

読意欲をかきたてられた思い出

岡　それは先生の学生時代と比べていかがでしょう、よく読んでるのもいるなあというか……。

玉村　やはり個人的に読書の好きな学生といいますか、そういうタイプと、それからほとんど読まないというタイプがあるように思います。それから英文とか国文とか、あるいは文化史の学生などで、どうも大学のテキストか参考書でどうしても読まなければならないので読んだのだろうというふうにも思えるのが何点かありました。

私の学生時代と比べてみますと、平均的にはやはり文学部の学生などは少ないのではないかなとは思います。私自身はあまり読むスピードがはやくなかったので、それほど短期間にたくさん読むということはなかったんですけれども、だいたいコンスタントに読みましたし、調子のいいときは通学の途次、いつも文庫本を持っておりまして、電車のなかで読書をする。読むスピードは遅いんですけれども、一日に五〇ページぐらいは読むということをやっておりました。それは同期同級の友達と比べてけっして多いほうではなかったと思うのですけれども。いま学生諸君の読書を見てますと、やはり意外にものを読んでおりませんね。全体としては読書量が少ないのではないかと思います。

玉村文郎氏

中村　私は英語の担当でして、接するのが一、二回生の学生です。あまり読書のことについて学生と話したことはないのですが、私の学生時代と決定的にちがう点は、いまの学生方がより多くの種類の文化に接していることだと思います。文字文化も一つですし、それから映像文化と申しましょうか、いろいろな種類の文化に日常接しておりますね。私の学生のころは、テレビがはしりのころでした。映画はたいそうさかんでしたけれども、読書がたいせつな文化の一部だったことをおぼえています。

どういうふうにして読み始めたかという記憶なんですけれども、大学のクラスで非常に読書を勧めるのがうまい先生がおられまして、まずギリシア悲劇を読まないと西洋文化は語れないですよ、と言われました。私どもはあわてましてね、みんなギリシア悲劇を読んだんですね。それを一通り終わりますと、ギリシア悲劇がわかるにはアリストテレスの『詩学』を読まないといけませんよ、と言われる。その誘導にひっかかって、どんどん読まざるをえなかった記憶があります。しかし、つい十五、六年前のことですけれども、本を手にいれるのが非常にむずかしかった。河原町のある本屋に行って、「アリストテレスの『詩学』を注文したいのですが」「岩波文庫にあります」「いえ、英語で注文したいのですけど」「いや、あれは英語の本じゃありません」と、本屋さんにばかにされ、店員さんにいじめられた経験があります。

四回生になりますと、林秋石という先生がおられまして、二〇世紀の文化を語るのに、きみたちはダーウィンを読んだことがありますか、と聞かれました。そのときは仰天しました。あわててまたみんなで買いに行って読むのですけれども、あれを読んでも何のことかさっぱりわからないんですね。おもしろさもわからないし、どれぐらい重要な本かかもわからない。でも、とにかくそういうふうにうまく読書欲をかき立ててくださった先生方がかなりおられました。先生の言われることにまじめに従って、いまになって考えるとギリシア悲劇から二〇世紀まで、押さえるところは押さえられたような気がするのです。でも、一回生のころはちょっと思い出しにくいのですけども、何も読まなかったような気がします。何を読んでいいかわからなかった。

吉岡幸子氏

同じようなことが、いまの一、二回生についても言えるのじゃないかと思います。なにを読んでいいかわからない時間だと思います。こんな本を読んだらどうですかと言ってやるのが非常にたいせつなように思います。

女子中高生はSFが大好き

吉岡　私の学校は女子中高で担当は国語でございます。そして去年とことし、図書室の校務にあたっているのですが、うちの図書室は、京都のほかの中・高校と比べますと非常に利用率がいいのです。よくびっくりされるのですけれども、各クラスで図書室利用者が中学で在籍数の約六〇%ですね。高校になりますと六七%ほどが図書室を利用しております。もっとも図書室を利用していないからといって本を読んでいないわけでもないし、またよく読んでいるような子で利用してない子もいるので、実数としてはもっとたくさんの人が本を読んでいるのじゃないかなと思います。いま高一を教えておりますので、この座談会の参考にとこのあいだアンケートをとってみました。

高一ですので、本格的な読書経験というのはまだ無理かなという気もしたのですが、大半が好きなのはSFかショート・ショートですね。それで好きな作家として出てくるのが、星新一が圧倒的に多かったです。それからアガサ・クリスティーとか、そういう推理小説、探偵小説類が非常に多いという結果が出ました。

図書室も実数からいうと、利用者は多いのですけれども、中学段階では探偵小説みたいなものが文庫本でどんどん借り出されますし高校になりましてもどちらかというと軽いものが多うございます。昔のいわゆる名作と呼ばれたような長編小説なんかに取り組んでみたらどう、とこのあいだも高一の生徒さんに話したりもしたのですけれども、時間がないというんですね、勉強に追いまくられて…。

岡　学内高校でもそうでしょうか。

吉岡　なにしろ、現代のこういう受験体制のせいか、なにか合理的に時間をパッパッと切りかえて、テレビを見るのが何時間、それがすんだらなんの勉強をして、それが済んだらなにをしてというふうにしないと、一つのものにのめり込んでいたのでは、遅れをとってしまうというんですね。

岡　受験体制の中で、それはよく言われることですね。だけど学内高校だと、そういう点は救われるのじゃないかと思っておりましたが。いまお話をうかがうとショート・ショートのたぐい、それからSFといったものが読まれているということですが、何年前でしたか、学内高校からの面接のときに、女子高校から来た人は口を合わせたように石川達三の『泥にまみれて』を読んで、いちばん印象が強かったというのです。『泥にまみれて』に描かれた女性観というのは男尊女卑そのものの古い女性観だと私は考えますので、それに抵抗を感じなかったですかと聞いたら、ひとりも抵抗を感じなかったという答えでした。ほんとにどこまで読んだのだろうかと思ったことがあるのですけどね。

女子大生の場合はどうなんでしょう。

大橋　私は別にアンケートはきっちりとらなかったんですけど、クラスで気軽に手をあげてもらいました。二回生以上のクラスで一カ月に平均してどのぐらい本を読んでいるのと聞いたら、四分の一ほどの学生が五冊以上ということでした。一カ月に五冊以上読んだというのはわりによく読んでいるなと思っていささか意外だったんですけれども、残りは一、二冊ぐらい。ところが一回生になりますと大学に入ったところで、一カ月に五冊なんてとてもというんですね。それから一人、堂々と一カ月に一冊も読みませんというのがおりました。なぜ読まないの、と聞いたら、本読む必要を感じませんというんですね。これはやはりちょっと考えてみなくちゃいけない問題ではないでしょうか。

緒方純雄氏

本を読まなきゃいけない、いけないと言ってますけれどもいろいろな文化に接しているなかで、本だけに取り組めと言うよりも、もっとなにか生き生きとやりたいことがあるのだったら、本とは別のものに集中していてもそれもいいのじゃないか、いろんな行き方があってもいいのじゃないかなと考えたりします。とくに理科系の方なんか、あまり本を読まれなくてもりっぱな方がたくさんいらっしゃるということを考えますと、頭でっかちに本、本とばかり言わなくてもほかの学び方もあるのかしらと、ちょっと迷っておりますのですけれども。

岡　やはり先生も迷っておられる……。

大橋　そうなんです。ただ、いまさっき玉村先生がおっしゃいましたように、読む学生と読まない学生の分極化は事実だと思います。私の教えている学生は英文科の子が多いので、二回生、三回生と上がっていくにつれて文学のおもしろさとか、読む楽しさとかが少しずつわかってきてくれればより人生が豊かになるのにと思いますが。

感覚的世代の長所と短所

岡　緒方先生、図書館長としてその利用状況とか、そういうところからお感じになることは……。

緒方　同志社大学の図書館は、年間一二〇万ぐらいの利用者が出入りしているわけですね。それから貸し出しの冊数はおそらく年間二〇万近くになると思います。ただ、たいへん図書館がにぎわう時期とにぎわわない時期がありまして、一月の試験期になると入館者は一日一万以上をかぞえますね。平常は五、六千、もっと下がるときもあります。ですから大学の図書館というのは学習図書館ということだろうと思います。館員から、「先生、学生が文学書を読まなくなりましたね」というコメントが返ってきますね。つまり学習の目的のために、心をそうはずませないで図書館を利用している学生が多いのじゃないでしょうか。先ほどからお話に出ておりましたように、読む学生、読まない学生という分極化もありますけれども、一般的に読まなくなりましたね。

私の学生時代といいますと、たいへん古く

中村春次氏

戦前になりますけれども、そのときには本を抱えて散歩するということは一種の見えみたいなものもあって、哲学書を抱えて歩くというようなことがありました。でも考えてみると、いまとちがってもっと社会が単純でありましたし、忙しいといっても一つか二つのことに忙しいということで、朝から晩まで多忙に追われるというようなことはありませんでしたし、勢い時間があるし、ペースもゆっくりしている。そのなかでじっくり自分の問題を考えて、それにつれて本を読んでいく、本が集まってくる。だから、だいたい書棚を見ればこの人はこんなこんなことを考えているんだという人柄がわかるというような時代だったと思うのですね。ところが、いまの時代は非常に感覚的だし、また複雑な社会現象に取り図まれているし、ペースがとてものんびりできない状態ですから、本をじっくり読むこともできないし、問題を深く考えていくようないとまもないだろうと思います。ですから読書するのには向かない状況だというふうにも思います。

ただ一つ、いまの若い人たちは非常に感覚的にすぐれている。私たちは身の周りの一、二のことにだけしか感覚を鋭くしなかったんですけれども、あらゆることに対してパッパッと感じていく。ですから多面的に広く感受性の強い世代というものは、次第に私たちとちがった問題の積み重ね方をしていって、本を読むにしても私たちとちがった形で本を読んでいくのじゃないか。それはかなり年を取ってからかもわかりませんね。三十を過ぎて、あるいは三十五ぐらいになるかもわからない。ともあれ、そういうふうに非常に感覚的なものにさらされておりますから、ちがった人間像が日本人のなかに出てくるのじゃないか。ちがった読書のしかたをやっていくのじゃないかというような不安と期待とをもっております。

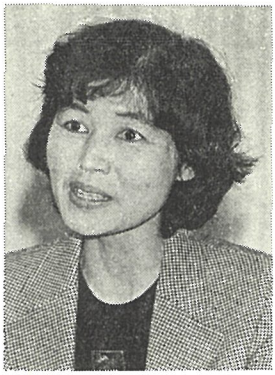
岡　いま緒方先生の言われた不安と期待というのは私もまったく同感なんです。メディアの世界ひとつとりましても非常に多様化したわけですね。といって、読書は片隅のほうに置いておいていいということが言えるのかどうか。先ほど中村先生が言われたように、活字文化ばかりじゃなしに映像文化、それからもう一つはオーディオ、つまり音の世界ですね。こういったものが生活のなかにいろいろ入ってきている。そういったものはたしかに人間の感覚を育てることにはすぐれていると思うのですけれども、物事の論理だとか、論理的な考え方だとかいうことになるとどうなんでしょう。

中村　たしかに大きな問題だと思います。映像を使って意思疎通をする場合は、とかく一方的になりがちですね。映像を受けたほうが、どのように受け返すかという手段はいまのところ言葉しかないわけです。ですから引き続き、言葉の文化は重要な文化であると思いますね。

そのときに、本を理解したり映像を理解したりする理解力はともかくとして、情報を受けて相手に返す能力をどのように養っていくか。それを考えたら、見て楽しむとか、五感

で理解するとか感じるとかいう、そういう表現だけでは不十分だということを学生諸君が気づいてくれればいいと思うのですけれども。

玉村　やはり思考のためといいますか、よく考えるためには、どうしてもよく読むということがなければならないんじゃないかと、これは年をとるに従っていっそう強くそういうふうに感じるのです。いまの学生を見てますと、下宿生でも小型のものにしろ、テレビやステレオのようなものをたいてい持っているようになったと、なにかの調査にも出ておりましたけれども、逆に机を持っていない学生がいるんだそうですね。(笑)



大橋寿美子氏

たしかに、テレビのような映像も含めましてマスコミから受けるものというのは、だいたい言葉がついておりましても一過性といいますか、瞬間で消えるわけですね。深く相手の情報を理解し、必要な場合は批判もする、あるいは反論もするというふうな深まりというのを、自分のなかでつくっていくということは非常にむずかしいのじゃないかと思います。そういうことができるためには、やはり書物——本でなくても新聞でも週刊誌でもよろしいですけれども、そういうものを自分で読んで、自分のなかでよく消化して、そしてそれに共感するなり反論するなり、あるいは追加意見を出すなりというふうな、自分のなかで血肉化していくことが必要なのですが、非常にいま弱くなっていると思います。

推理小説なんかよく読まれていますので論理の組み立てが上手になっているかというと、そうとはいえないようです。卒業論文などを書きすすめる場合にも、論理を組み立てていくというようなことがなかなかできませんし、そのまた元になっている言葉の面での正しい整合性といいますか、そういうようなものが非常に希薄になっているように思います。そういう点で、やはりいい文章に目ごろからよく接していくということが大切じゃないかといつも思いますね。

読書欲を阻害する受験体制

岡　学生が本を読まなくなったといわれますけど、それはこれまでもお話に出ましたように社会が複雑化して人びとの生活が非常に忙しくなったこともたしかなんですが、なによりも私は高校段階での受験勉強の弊害といっていいのじゃないかと思いますがね。いまの高校生活は、つきつめた言い方をすれば大学への受験準備がすべてだといってもいいでしょう。まず中学に入れば高校に入るための準備、高校に入れば大学に入るための準備という生活のなかではどうしても読書がおろそかにされがちではないでしょうか。学内高校の場合はちょっと事情がちがうわけですが、この点はいかがでしょうか。

吉岡　うちの学校には高校にから入学してくる生徒が一クラス分ほどいるわけですけれども、高一のなかのそういう人が共通して言うことは、やはり中学時代は高校受験のために読書をあきらめてました。同志社へ入ったのでぼちぼちこれから始めようと思いますというようなことです。だから、たしかに、受

岡　満男氏

験体制というのが、公立の学校ではもっと大きく影響しているのじゃないかと思います。

岡　先ほどの玉村先生のお話じゃありませんけど、新聞学専攻に入ってきた学生に、一冊なにか感銘を受けた本を書くように一回生の授業で言ったところ、書く学生は意外に少数でした。ということは高校時代に試験問題集以外ほとんど読んでいない。試験問題集と教科書とで活字はもうたくさんだといった感じですね。見るとか聞くとかいうことは、何かをしながら、いわゆる〝ながら族〟でできるわけですね。たとえば耳にウォークマンみたいなものをはさみながら受験勉強をやるとか、そういうことはできるわけですね。読むということになると精神をそこに集中しなければ読めないわけなんで、その点、文学を読むことなどどうも受験勉強によって阻害されているのじゃないでしょうか。

それともう一つは、受験勉強のなかであまりにも日本語の作文を書く機会が少ないことも大いに影響しているように思われますね。書く必要がないから、また読むことにもうとくなる。聞くだけで十分だ、見るだけで十分だということになっておりはしないでしょうか。

緒方　いまの若い人を見ていて非常にうらやましいのは、中村先生がさきにいわれたように多様なものに対して自分の感覚をすなおにもっているということですね。そうした感性的なものが、ものを考えるところの下地になって、それが論理を形づくっていくものになれば、それはそれでいいと思うのです。ですから初めの感覚とか感性といったものが非常にだいじだというふうに思うのですが、いまのような状況ではその感覚が瞬発的になって、聞いて次の瞬間には消えてしまい、またちがった感覚になってしまって続かないんですね。

だから、私はむしろ普通の生活パターンから学生諸君がぬけ出して、実習といいますか、フィールドワークなど日常生活とちがった場に行ってちがったものを体験して、少し自分のいる環境からぬけ出すようなことを努力したら、瞬発的でない感性が培われていくのじゃないかと思います。それでキャンプとか旅行だとかいうことを学生諸君に勧めるのですけれども、なんといっても取りまいている状況がまずいですね。受験体制がとくにね。おとなになったらこんどは職場生活で、これはまたちがった意味でね。

岡　先ほど、先生のおっしゃったように、三十過ぎて少し本を読もうかと思ったときにはだいたい管理職になっていくわけですから、こんどは組織のなかの管理ということで、なかなか本を読む時間が持てないということにもなってしまいますね。

緒方　ちょっと悲しい状況ですね。

吉岡　中村先生がお若いときに本がなかった、それを探して見つけ出したときの喜びというか、そういう経験をお話になりましたがいまの若い人は、物がありあまりすぎて、恵まれすぎていてかえって不幸なのではないかと思ったりします。

私も中高教師として、自戒しているのです

けれど、おとなが若い人に親切すぎるのじゃないかなと思うのです。例えば生徒が何か答えますね、そうすると、ああ、そうと言葉を最後まで言わせないで、こちらですくってしまうんですね。さっきの感性の問題もありますけど、ポンポンポンと単語でものを言う癖が若い人たちにあって、そういう癖が文章を書くときにも出まして、国語の答案なかんでも、日本語だと打ち消しとかはうしろにまいりますよね。それが、何々……と書いて、ポンとしり切れとんぼになっているのです。何々がどうしたという最後まできちんと書いてないとだめだと言うんですけど、先生、話し言葉の場合は、何々と言ったら、そうよって言うじゃないかと……。(笑)

岡　それは一つはテレビの影響だと思いますね。読むのじゃなくて、見る聞くという……。話をするかぎりはそれでいいわけなんですよね。

吉岡　そうなんです。ですから私は最後まで生徒に、それがどうしたのって言わせる癖をつけないといけないと思って……。

玉村　話し言葉の教育というものが日本では伝統的に行われていないですね。文章を書く教育というものもありはするんだけれどもやはり十分完成されぬまま、ずっと押し込まれてきている。いろいろな方が指摘されていることですけど、大学の受験制度、中学から高校への受験制度のなかでも、とくに共通一次というのが相当悪いはたらきをしているのじゃないでしょうか。受験生なんかに聞きますと、とにかく考えたらだめだ、反射的にパッパッパッと反応して鉛筆で塗りつぶすことをやらないとだめなんだという、あのシステムですね。ですから浅くてよろしい、広く知っておくことがだいじだというふうなことがあって、じっくり考えるということがなくなってきていると思うのですね。

同志社大学に入りたいと言っている高校生に会って、いろいろ話を聞くことがあるんですが、国文学専攻志望というんで会いますと、『徒然草』を読みました、『枕草子』が好きで清少納言の世界にひかれています、なんて言うんです。じゃ『徒然草』のどんなところに感激したのかというと、忘れました。『枕草子』と言うから、清少納言のどんなところにひかれるのかと聞くと、忘れました……(笑)。結局よく読んでいるのではなくて、教科書にどこの部分かが出てきた。それだけを取ってつけたように言うんですね。そこの部分で感激したから訳本ででも全体を読んでみるというのでなくて、教科書に出てきたから好きだといちおう答えておく。明治文学にしてもそういうのが非常に多いんですね。

高校時代というのは、昔の世代でいいますといちばん読書が自発的に広範囲に行われる時期だろうと思うんです。いわゆる思考のための母語の内的言語活動がいちばん活発になるときだと思うのですけれども、そのときに、とにかく五教科とか八教科とか、背水の陣で分きざみで勉強している。余暇は息抜きに音楽を聴くとか、スキーに行くということになってしまう。帰国子女の場合も、やはり母語の形成期に外国にいるせいか、そのためにひ弱になってしまっていると思いますが。そういうことで、総じていまの学生は、大学に入ったらのびのびとしたいことをするんだという人が多いですね。これは象徴的な話のように思うのですけれども、さきごろ、大阪に行く用事があって、ある私鉄の特急に乗ったときのことです。小学校一、二年ぐらいの女の子を連れたお母さんが私のいた車両に乗

ってきたんです。私と通路をへだてた左側に一人、一見大学生とおぼしき学生がすわっておりまして、その大学生の隣に女の子がすわったんです。大学生は『少年サンデー』か何か、漫画雑誌をいっしょうけんめい読んでおったんですが(笑)、その子供のほうはすわるなりお母さんから小さい本をもらいましてね。『小公女』だったか何か忘れましたけれども、いわゆる子供のために書かれた名作物語を読みだすのですね。学生が漫画を読んで小学生がちゃんとしたストーリーのある本を読んでいる。大学に入ってからは漫画しか読まないとか、週刊誌しか読まないということをよく耳にするんですが……。

岡　漫画には漫画の効用があるのではないかという気持ちがするのですけど、どうでしょうか。

中村　漫画も映画も音楽も、それぞれたいせつな日常の文化だと思うのです。最初のほうでも言ったようにそれを受けとけとめてだれかに投げ返すときには言葉という手段しかない時代です。これは将来もたぶん変わらないと思いますが、その点をわきまえてさえいればいろいろな文化を感覚的に理解することは意味があります。もっとも私は必ずしも感覚的に理解されていると思わないのですけれども。

軽い文章はなかなかうまいが

吉岡　これは表現力の問題になりますけれど、ちょっとふざけた態度の文章とか、若い人はうまいですね。

岡　どちらかといえば、そういう文章は、私どもの世代の不得意とするところですね。

玉村　高等学校の卒業文集とか、それから大学内のクラブの新入生歓迎用の文章というのがありますね。ああいうものを見ますと、非常に表現力があって、読ませる文章がありますね。同級生とか、同じクラブのキャプテンだとか、女子学生のプロフィルなんか書いているのですけど、秀逸な文章がいっぱいあって、うまいなあと思うのですが、どちらかというと、それは閉ざされた小グループのなかで、よく気ごころのわかっている仲間同志の言葉で表現しているからですね。改まって不特定多数を対象にして内容のあることを書かせるということになると、非常に弱いという気がするんですね。そこらへんがおおぎょうな話ですけれども昔の文章修行とだいぶ変わってきているところじゃないかなと思います。ちょっと笑わせるような、軽い文章はみな上手ですよ。

中村　たしかに自分を表現するということは得意かもしれませんけれども、作文の一つの目的である相手を説得したり説き伏せたりというテクニックはまずいですね。何のために文章を書くのかという基本のところで自分を表現すればいい、それでレポートは全部すむと考えている学生が多いように思うのです。レポートにはたくさん種類があって、感想を書いて自分の考えを述べるだけでいいときもあるし、相手を説得しなければならないときもある、書く目的にはたくさんあるということをあまり知らないように思います。

緒方　修士論文の指導など、ある意味でだんだんむずかしくなってまいりましたね。つまり、私たちのほうで字を書き直して、文章をつくってあげなくちゃいけないという、そういう労働まで要求されてまいりますね。先ほど論理の問題が出ましたけれども、自分の思っていることだけを書き散らしてそれが論理だとして、相手に十分コミュニケートして

いくような努力をしない。論理的な人間関係という言い方は少しおかしいのですけれども、人間関係にはやはり人間同士の論理が必要だと思います。が、そうしたものが失われて、非常にべったりした、甘えるような人間関係になっているから、自分の思っていることだけ言えばいいんだと、いつの間にかそれが許容されるような一つの考え方があるように思うんですね。その点を非常に強く感じます。論文など見ておっても、自分が納得して、読んでもらう人にそうだとうなずいてもらうというよりも、君の論理はよくわかった、君の論理は尽くされているというような指導教授からの言葉が返ることを期待している面が強いみたいですね。

国語教育に問題がある……

緒方　それからもう一つは、日本人の人間関係には論理的でない、エモーショナルな人間関係がある。そのため論理を立てて、論理にさおを差していけば自分がつぶれてしまうような社会関係もあるように思います。そういう日本人に特有の、おかしな表現ですけどエモーショナルな非論理的な人間関係、社会構造といったもののなかで、あまり論理的にものを考えるのは、むしろヤバイぞ、というような考え方になってしまう。そんな面も一つあるようでもね。

大橋　それは小学校時代からの国語教育と作文教育に関係があると思うのですけれども日本の小学校の作文というのは、非常にエモーショナルな目をもってものを書かせますね。自分の言いたいことはこれだから、そのために、こうこう筋を立てて、こうなんだというふうな、論理を立てた説得のしかたをするような作文教育というのはいっさいございませんでしょう。私も大学に入りましてもそれが全然なかったのに、留学先のフランスの教育はまったく反対なんです。大学入学資格試験でも、何々について論ぜよというふうで四時間かん詰めになって論文を書かせられるわけで、小学校の頃からそういう教育を受けている。言いたいことにもっていくための論理の立て方、思考訓練というものが日本の国語教育では弱いように思います。

吉岡　私の学校も女子の特色かとも思いますが、国語でも小説なんかが出てきましたら生徒は飛びつくのですが、論説文と名がつくとみんないやぁな顔をいたしまして、論理の展開を追うというふうな授業だと、なにかしらけムードみたいになっちゃいますね。

じつは読書感想文コンクールというのが中高段階でございます。私の学校では夏休みに全校生徒に宿題で、一冊必ず本を読んで、四〇〇字詰五枚、二〇〇〇字程度の感想文を書いて出させているのです。それをまず私学で選考しまして、そのあと公立と合わせての選考があるのですが、先日その審査で出かけまして読んだかぎりでは、同志社はなかなかいい線をいっているようです。同志社中学からも岩倉の高校からも出てまいりますが、皆さんそこそこ筆は達者なんです。しかし、いわゆる論理性のある文章ということになると、やはり女性はどちらかというと苦手なようですね。

大橋　その点は、大学になっても、あまりかわりませんね。

吉岡　うちの生徒が感想文として出しますものは小説が大方ですね。しかも案外オーソドックスな文学作品を選んだりもしているわけです。それで、こんなものを選ぶということは、常日頃からよく読んでいるということ

かと聞いたんですけれども、これはもう、感想文を書くために特別に読むのであって、常はあまりこういうかたいのはしんどいからいやだ、とはっきり言う生徒がおりましたので、やはりある程度強制してでも、こういうふうなものを読ませたり、書かせたりする機会を全校生徒につくることがだいじなんだなあと、このごろ思っております。

岡　ただ、どうなんでしょう、読書の習慣というものは強制して育つものなんでしょうか。探す喜びということを中村先生が言われましたけれども、私なんかも自分の少年時代を見てみると、何かをきっかけにして自分で探して、読みたいものにぴったり合ったものが発見できたときの喜びというのは、これは強制されて生まれたものじゃないんですね。しかもいまのように物がゆたかだと、探すよりも先に、先生、選んでほしいということになってしまいかねないわけです。

大橋　探す喜びがなくなったと言われるのは、テレビや受験勉強などの影響のほかに、本がありすぎることだけじゃなくて、生活自体が安定して、いわゆる飢餓感とか欠落感情とかいうものがないから、本に何かを求めようという自発性がなくなっているんだと思うのです。

岡　もう一ついえば、機械が日常生活のなかに入ってきたことも言えるのではありませんかね。たとえば電卓、すこしややこしい計算でも機械がかんたんにはじき出してくれます。人間は別に考えなくてもいいわけです。そういったものが生活態度のすべての面に及んでおりはしないでしょうか。

中村　受験問題そのものが、最近はそのようになってきてます。私は英語の試験に関係があるので反省するわけですが、たとえば最近の同志社大学入試の英語の問題を見てますと、ほとんどマルティプルチョイスで、考えなくてもいいですね。まちがっているのを探し出して除去していって、合っていそうなものが二つぐらいあって、そのうちのどちらかが正解。一種のあてものです。問題自体は非常に内容のあるものなんですけれども、それに答える方法がいまはマルティプルチョイスしかないわけです。もっと論理を組み立てたり、組み変えたり、組み直したり、自分の意見を述べたりというような試験はまったくありません。与えられたもののなかから合っていそうなものを探すという作業だけで、機械的な作業になっています。

玉村　まあ全体じゃないけど、だいたい日本の国語教育という面で考えますと、小学校の先生は児童にいちばん強制的によく作文を書かせる。それが中学校になるとだいぶ減るんですね。高校に行くと、書かす先生でも答案以外に年間三回書かせたらいいほうで、だいぶ前に聞いた話ですが、中学校は学期に一回、高校になると学年で一回か二回というのが普通なんだそうです。小学校ですと絵日記のようなものでも毎日書かせて、あくる日に先生がすぐに添削して返すというのがあるのですが、上のほうに行きますと、ずっと少なくなってきまして、大学になるとレポートとかありますけれども、国語教育としてではありません。その点、旧制の学校制度の場合ですと、たとえば昭和二十二、三年ごろを見ても、同世代の三%ぐらいしか高専以上に進学しなかった。そういう時代には、大学にあがるまでに一応の、古典ならば『源氏物語』とか特別のものを除いて、候文であっても一通りこなせるようになっていました。

ところが、いまはそれが読書量も少ない。

それから書くという作業が、学校を除きますと実生活のなかで必要性が少なくなってしまった。昔ですと、恋文、つまりラブレターを書くとかいうようなことで、フィクションでもとにかく、ありったけの文章力を駆使して何回も書直して手紙にするということがあったと思うのですね。それがいま三〇分でも一時間でも電話で話をする。女友達を誘う場合でも全部電話だし、あるいは直接ぶつかってみるというやり方ですから書く必要がほとんどなくなりましたね。学生諸君が書くといえば、まあ年賀状くらいじゃないでしょうかね。

論理的な表現力訓練の必要

岡　ここらあたりで、表現力の問題に話題を移したいと思います。先ほどからしばしば話に出ますように、たしかに若い人たちは軽い文章、感性的な文章、おもしろい文章はうまいですね。しかし、人にコミュニケートする文章ということになると、論理的でなければならない。表現力の問題点は、まずこの点にあるようですね。

緒方　やはり戦争が終わってから、日本人全般に家庭でも論理がなくなりましたね。子供たちはてんでんばらばらにいろんなことをして大きくなっていきますから、いたずらに拡散されたような状態で特定の本を読むということもないまま、いろんなものに飛びついていくということがまずあるだろうというふうに思います。

それから表現力の問題ですけど、すばらしいなという表現力をもっている学生もいるわけですよ。私たちの以前の基準からすれば表現力がすばらしいなとちょっと言えないような表現もありますね。たとえば、イギリスで勉強していた女子学生が私に手紙をよこしまして、美術館に行ったとき感激して頭が痛くなりました、というんです。頭が痛くなるほど感激しました、ということですね。これには感心しました。それに類した表現はいろいろあると思うのですけれども、先ほどからの繰り返しですが、こんなに非常に感覚的な表現力はあるのですけれども、論理的な表現力は乏しいと思います。

この前、神学部の演習の時間に一人の非常に朴訥な学生が、言葉が下手で詰まり詰まり、自分の体験した現場の報告をしてくれました。もどかしいほど詰まりながらでしたけれども、その表現しようとすることは私の心に非常に響いて、すばらしいと思いました。言葉がなめらかでなくても、あるときにはあまり論理的でなくても、芯（しん）に何かをもっていたならば、それは言葉という障壁を超えてすばらしい表現力を発揮することがある。芯があれば、その人は、いままでの表現がかりにまずかろうと、もっと的確な表現に発展させていく可能性も残されているのじゃないか、と思います。ところが、そうした学生ばかりじゃありません。芯のない学生は、結局感覚的な表現で終わってしまいますね。

大橋　表現するためには、表現したいものがまず必要なわけなんです。そこのところがあまりなくて、みんなと同じようにホイホイと気軽に生きていたらすむというわけですね。そこで、学生にちょっとゆさぶりをかけて、はっきりイエスかノーか、好きか嫌いかを言わせたい、あるいは極論を言って何か刺激を与えたいとがんばっているんですがめんどくさいじゃないって、いなされてしまったりしましてね。受けとめる子がいるといいなと思うんですけれども。

緒方　そういったことを、どうしたらいいのか。たいへん教師めいたことを考えますとどんなことがいいのでしょうね。私はときどき、外国の本を読む学生に、きみ、それを日本語であると考えて、日本語で読んでおもしろくないような外国の本は読むなと言うんです。そんなことすれば、英語にしたってドイツ語にしたって嫌いになるのはきまっているんだから、日本語で読んだら引きずり込まれて徹夜をしてでも読みたくなるような本を外国書で読みなさい、そしたら外国語がうまくなるからというようなサゼッションをするのですけれども。もう少し丁寧な、強制じゃないんですけれども、こんな本はきみにとっておもしろいのじゃないかと、なにげなく学生に示唆してあげたほうがいいのじゃないかと考えたりしております。

映像の土台には言葉がある

中村　ちょっと話がずれますけど、最近『E・T』という映画を見ましたが、あとで話をするような内容は何もないんですね。同じスピルバーグの『レーダーズ』という映画も前に見ましたけど、あれも、うわぁおもしろい、楽しい、すごかった、それだけですむ映画で、あとで何か話そうと思っても何もない。二〇世紀後半の典型的な映画だと思うのですが、インフォメーションはものすごく多いんですね。ただそれをどういうふうに、だれに投げ返していいかわからない。学生だけじゃなくわれわれも、いまの文化のなかに入っていったら体験するのじゃないか。私自身、どういうふうに、だれに投げ返したらいいか、どういう言葉を使ったらいいか、よくわからないこともあります。

ブック・レビューとか、映画のレビューとか、レビューという形式を学生に教えるときもあるのですけれども、あまりピンとこないようですね。二回生、三回生になってもレビューという形式がよくわからないような状態です。相手を納得させるのに、映像とか音を通してコミュニケートできるような効果的な方法があれば、言葉の文化もいままでとまったくちがった役割りが出てくると思うのです。いまのところ文字文化、活字文化は引き続き重要な土台にあるんだと思います。

玉村　少し古い話になりますが、『裸の島』という映画がありましたね。京都の聾学校の中等部と高等部の生徒たちにも見せて、感想文を書かすことを聾学校の先生たちが考えたんです。一つの実験的な試みだったと思うんですけど、ほとんどせりふのない映画でしたから、聾学校の生徒たちにも理解できるのではないかというわけだったんですけど、感想文を読みますと、全然ちがった解釈あるいは誤解みたいなものがずいぶんたくさんあったと聾学校の先生から聞いたことがあります。結局、新藤兼人のせりふを使わぬ映画の実験は、言葉をもっている人びとが無理に言葉を押し殺して、映像で語るというふうにやったわけですね。だが、あれは映像だけで語っているのではなくて、やはり映像の土台に言葉があるんだということがわかったということでしょ。そういう意味ではいろんなテレビの番組なども、言葉がものすごく活躍しているわけです。しかし、自分のなかで反すうして、そしてなにか世界をふくらまし、あるいはそれから感性とか論理の世界をゆたかなものにするという点で、やはり論文とか小説物語などを読むのとはちょっとちがう。そのちがいを私たちは意識するんですね。

緒方　私は牧師をやったことがあります

が、牧師は説教しなければいけない。だいたい日曜日に説教を二〇分か三〇分しようと思いますと、一週間は自分が話そうとするテーマに自分を合わせていかないと話ができない。これは一つの非常に極端な例かもわかりませんけれども、やはり話すとか表現するとかいうことには、話す主体である自分というものがはっきりしていないと、なにを話していいかわからないと思うんですね。自分というものがある程度できていないと、話すこともできないのじゃないでしょうか。

たとえば外国の人と話をすると、語学の問題じゃなしに自分というものがないから、むこうが論理的な話をしてくると、講演があってもほとんど質問もなしに終わってしまうということになります。だから自分というものをつくっていくような努力が学生のうちにできたら、もう少し社会に出てからでも自分をもった生活ができるのじゃないかと思いますが、たいていみんな、いろんな不平を言います。職場の関係だとか、そのなかに圧殺されているようなことを言いますが、じつは自分というものがなくて、あるのはたいへん感覚的な拡散された自分だけなものですから、容易に圧殺されているというふうにも思うのです。ある程度、自分というものをもっていれば、かりに職場で圧殺されても圧殺のなかから詩が出てくるだろうし、もっとゆたかな表現も出てくるだろうと思いますね。ぐちばかりで赤のれんに行っちゃうということでは、どうにもしようがないですね。

大橋　やはり青年期というのは自我の確立の時期ですから、なにかもう少し自分というものとか、人生とかいうものを見つめるだいじな時期のはずです。こちらのほうが少しおしりをたたいてでも問題意識をもたせてやりたいなあと思います。若いときに読んだ本の印象と、三十過ぎて読んだときの印象とは全然ちがいますね。人生の受けとめ方もちがう。そういう意味では、いまの学生がトルストイとか、ドストエフスキーとか、ロマン・ロランとかをほとんど読んでいないのは、残念なことだという気がするんです。

吉岡　先ほど、岡先生が読書というのは本来強制するものではないと言われましたが、そのことも十分わかるのですけれども、大学が大衆化した今日、読書の動機を与えてやるというか、強制じゃなくて、こういうものがあるのよ、こんなのもあるのよというふうな形の情報提供することも案外だいじなんじゃないでしょうか。たとえば中三の子なんですけど、ヘッセの『車輪の下』を読んでずいぶんいい感想文を書いた子がいたんです。最近の中学生はヘッセなんか読まないんですね。どうしてヘッセという名前を知ってたの、と聞いたら、お父さんが勧めてくれたというんですね。夏休みに何を読もうかと言ったら、お父さんがこれはどうだろうと言ってくれた。だからちょっと動機を与えるということは大学でも必要じゃないかなと思います。

岡　自分の中学生時代を振り返ってみまして、教師からこういったものを読めと言われると、なにか鋳型にはめられるようでいやでしたね。私自身は有島武郎のものが非常に好きだったが、有島武郎のものを読めと言った先生はいなかったです。もう一つは自分で見つけた山村暮鳥という詩人の作品が好きでしたね。とくに暮鳥の詩は私自身の、多少大げさな言い方をすれば人間形成に非常に役に立ったように思います。暮鳥にしてもこういう本読め、という教師の意見のなかには入ってこないものですよ。たしかに、大橋先生がさ

っき言われたように、武者小路実篤の『愛と死』なんかいま読んでみると、感動をさそわないばかりか、退屈ですよ。十五、六のときに読んだ思いといまとではだいぶんちがいますね。ともあれ、私自身少しへそ曲がりかもしれないけれど、自分の経験からいって、読書は他人から強制されるよりも、自己啓発というか自分自身で一つの世界をきずく努力がたいせつだと思います。

ところが、いまは読書に限らず、生活すべてが簡便なハウツーものに支配されがちなように思われます。私はそれが非常に不満なんで……。行きつくところは団地なんかに住んでいると、そのなかの生活が全部同じ様式に画一化しちゃいますよね。おとな自身がつまらないことをやっていると私は思うのですけれども、そうは言いつつ、新聞字専攻に入ってきた一回生には、多少こういったものを読んだらどうだと言ったりしますが、そうすると、言ったものだけしか読まない学生が少なくありませんね。おそらく皆さんもそういうご感想をおもちだと思うのだけれども、さっぱり横に広がらない。また読めばそれを通して自分の人生観なり社会観なり、なにかゆさぶられてしかるべきだとも思います。

もう一つ、書くということは読むことによって支えられるもので、表現力なども読んだものの量が多ければ多いほどゆたかになるはずです。とくに論理的な表現力というものは、そういうものだと思います。だいたい表現力も含めて文章力というものは与えられるものではなく、読書と同様、自己啓発といいますか、自分でその気にならなければ養われるものではありませんね。

私が新聞記者をしていたせいか、毎年秋の就職試験シーズンになると、新聞記者志望の学生諸君がやってまいります。新聞社の試験は作文力が大きく問われるが、作文力を身につけるにはどうしたらよいか、というわけです。しかし、文章を書くにはこうしたらいい、ああしたらいいと、いくら技術的なことを話しても、それだけではどうにもならない。最近いろんなところで文章教室などが開かれて、玉村先生や私なども講師をつとめることがありますが、どんなに文章の書き方を技術的に解説しても、それを聞けばたちどころに文章が書けるようになるわけではありませんよね。ただ読書にしろ表現力ということにしろ、学生諸君の自己啓発の動機づけを私どもは考えることがたいせつですね。

読書は一生のものでありたい

岡　だいぶん時間がたちましたので、そろそろ結論に入りたいと思います。いろいろとご意見が出ましたが、読書というのは、やはり学生生活にとって非常に重要な部分だということですね。しかし、それはなにも学生にかぎったことではなくて、人間の一生にとってたいせつなことと言えます。とは言うものの私の世代を考えてみましても、学校を卒業して社会に出ると、肩のこるような本は読まなくなってしまう。昔で申しますと『講談倶楽部』や『キング』のような大衆娯楽雑誌の愛読者になってしまっている。これではいまの若い人を笑えませんね。それぞれいろいろな企業に職場を求めようと、家庭の主婦になろうと、読書生活というのは一生の問題としてとらえるべきだと思いますが、いかがでしょうか。

緒方　むずかしい問題ですね。学生でもこれまで皆さんが言われたような問題があります。社会人となるともっと切実に日々の生活

の問題と結びついた職業人としての生活がありますから、そのなかで読書をつづけていくということは非常にむずかしいことだと思います。じゃどういうふうにして読書を進めていくことができるか。物理的な一つの要因をあげれば、やはり自分の家には、自分の好きな本を持った小さいながらも読書する場所があってしかるべきじゃないだろうかと、ぜいたくかもわかりませんけれども、そう思います。これは男性にも女性に対しても同じことだと思うのです。それから、あまりとてつもなく自分の生活から離れたような本を無理に読む必要はないと思います。できるだけ自分の問題、自分の職場生活のなかでフッと心にうかんでくる問題を、ちょっと時間をかけて見つめ、考えて、それに合った書籍を先ほど岡先生が言われたように自分で探して読む習慣をつけることがたいせつじゃないでしょうか。あるいは学生時代に自分の歩みといっしょになってきたところの、いろんな自分の感想などを書き込んだような蔵書をもう一度読んで、初心を取り戻すことも一つのはずみになるかもわかりません。そういう形で教養をもった職場人になってもらいたいと思いますね。

大橋　学生時代になにも本を読まなくて、社会人になってから読めといっても無理な話でして、やはり本を読む習慣は学生の間にぜひなんとか身につけてほしいなと思いますね。そのためには教師はそれだけの刺激を与えなければならないと思います。

それからもう一つ、女性の立場あるいは女子教育の立場として、ほとんどの女性が母親になる。こんどは家庭のなかで次代の再生産をするためには、母親が本を読んでなかったらそれこそギャップになってしまいますね。ですからこんどは子供といっしょに読んでいけるように、そして子供といっしょに成長できる母親であるためには、やはり読書の習慣を身につけることがたいへん必要ですね。

玉村　私も大橋先生が言われるように、学生時代は半ば強制力をもたせてでも、わりあいかたいものを、とにかく読む胃袋をつくっておくべきじゃないかと思うのです。そういう意味では論理学の本とか、あるいは論理的な書きものを読む習慣をつけてほしいですね。

社会に出れば、いろいろそればかりにかまってられないとは思いますけれども、やはり三十歳、四十歳になっても、これは私、小説をうんと読んでほしいなと思います。これも大橋先生のほうがご専門だと思いますけれども、フランスなんかでは高世代の人が小説などをよく読んでいるので、若者とのコミュニケーションができるというふうな話を聞いたことがあります。できるだけ柔軟なみずみずしい感性を維持するためにも、読書を続けてほしいですが、どうもいまはたくさん本がありすぎて、どれを選ぼうかと迷うと思うのですね。そういうときには、いちばん原点に返ってかたいものを読むというところからスタートして、卒業してもそれを少しでも維持できるように努めてもらえたらと思います。

緒方　小説を読むということは非常にだいじですねえ。小説読めなくなったら人間だめですね。

中村　社会に出る前の学生時代がやはりだいじですね。私は学生には、もしも西洋文明を全体的に理解するんだったら、『聖書』とギリシアの古典文学から出発しなさいといつも言うんです。私の学生時代を思い出して古典が与えた影響は決定的に大きかったように

思います。それが実感として私にまだありますので、学生がいやだと言ったらそれまでですが、やはり西洋の古典から始めて、それに感動を受けるんだったら自然に道がひらけて行くと思う。

吉岡　生徒のアンケートで、本が好きだと言った子に、読書が好きになった動機を書かせてみたところ、やはり幼児期に、お母さんに本を読んでもらったり、こんな本を読めと言われたことが核になっているんですね。だから女子学生の方々は、将来いい伝統を受け継いでいくための母親としても、ぜひ読書をつづけてほしいと思います。

岡　いまもお話のありましたように、社会に出てしばらくすると、だれもがお父さんになりお母さんになるわけで、お父さん、お母さんに読書の習慣がなければ、子供に読書の習慣をつけようといったってどだい無理なことですね。今後も受験体制がいまのような形で進むのだとしたら、読書の習慣は家庭でつけることがますます必要になってきますね。私の知っている夫婦に、毎夜二時間はテレビを消して夫婦でそれぞれ本を読む、そしてときたまはその読んだ感想を二人で話し合うということを続けている夫婦があります。その夫婦には子供がないのですけど、そういう環境のなかでもしも子供が生まれていたら非常にうまく育ったのではないかと思います。やはり若い人をどうだこうだと言っても、結局はおとなたちがよい環境を与えてやらなければということを、読書の問題を通しても痛切に思うわけです。

どうも長い時間、ありがとうございました。

（一九八二年一二月一六日収録、於同志社有終館第二会議室）

表紙の言葉

彰栄館の塔

修復工事が終ってから初めて彰栄館を描いて見た。内部に鉄骨が組まれ、レンガも洗われた、時計の文字板も新しくなり、この塔はたしかにきれいに、強くなった。おそらくまた百年二百年の風雪に耐えていくことだろう。

しかしどこかによそよそしさを感じさすようにもなった。きっと大手術のあとの疲れにも似た緊張がまだのこっているのであろう。

小野　功夫（中学校教諭）